

思ひ草

第48号

令和7(2025)年11月28日 発行

災害への備えとしてのTKB + C

子ども支援学科教授 (防災士)

すず き 鈴木 みゆき



昨年元旦に能登で大きな地震が起こり、発災後の避難所の光景が、東北大震災や新潟中越地震の時と変わらないことに衝撃を受けた方もいらっしゃると思います。日本は、地震とそれに伴う様々な災害(津波等)、火山の爆発、森林火災、台風やゲリラ豪雨等の気象災害とそれに伴う土砂災害…などが多発する災害大国と呼ばれています。その中で昨今話題になっているのが「災害関連死」と呼ばれるものです。「災害関連死」とは、災害による直接的な被害ではなく避難生活やその後の健康状態の悪化などが原因で亡くなった場合の死を指します¹。

災害時に生き残ったにもかかわらず、避難所で不衛生な環境や劣悪な生活によって命を落とすことがないように避難所の光景を変えようと国も動き始めました。もともとはイタリアで行われている「発災後48時間以内に、避難所にトイレ(T)、温かな食事が提供できるキッチン(K)、眠れるベッド(B)が届く」という慣習を真似たものですが、私はそこにさらに子どもの居場所(C)を付け加えたいと

思います。乳飲み子を抱えた保護者や支援が必要な子どもにとって、今の避難所は休める場所ではありません。体育館の一角を区切っておもちゃを置いて、大声を出したり走り回ったりはできにくい状況です。いっそコンテナカーのような密室感のある空間で、跳んだり跳ねたり、保護者がカウンセリングを受けられたりできるといいなと思います。

幼児教育においても「領域 健康」で避難訓練を扱い、園児の教育施設では避難時に「おはしもち(押さない・走らない・喋らない・戻らない・近づかない)」の合言葉を使ったりします。また園児の引き取り訓練や地域防災等で保護者との連携も図ったりしています。

いつ、どこで、どのような災害が起こるかわからない日本だからこそ「備えあれば憂いなし」を心に刻み、日々の生活に活かしていくことが大切ではないかと思っています。

¹ 災害関連死とは？事例や原因、対策を解説 | 記事一覧 | くらし×防災メディア「防災ニッポン」読売新聞(2025年10月31日取得)

「共に学ぶ」学校づくりの担い手に

初等教育学科教授

たかはし さちこ 高橋 幸子



現行学習指導要領の告示から9年が経過し、「主体的・対話的で深い学び」の理念のもと、授業実践が豊かに繰り広げられてきました。早くも昨年より次の学習指導要領についての議論が始まり、先日中央教育審議会から論点整理が示されました。

特別支援教育に携わる立場として、何より注目したのは「多様な子供たちを包摂する」という表現です。近年、外国につながる児童、貧困、虐待、ヤングケアラー、性的マイノリティ、不登校など、障害を含め「特別な教育的ニーズ」を有する子どもの存在に関心が高まっています。学習指導要領改訂にあたり、どの学校にも多様な個性や特性を有する子どもが在籍しているという実態に目を向け取り組もうとする方向性が示されたことに期待が高まります。

さて、本学で特別支援学校教諭免許状取得のための課程が開設されてまもなく10年となります。多くの学生が「通常の学校で、特別支援教育が担える教員になりたい」と履修の動機を語ります。「一人ひとりを丁寧に見つめること」

「個に応じて教材や教具を工夫すること」「教職員の協働が求められること」「保護者や関係機関と連携すること」など、特別支援教育で大切にしていることは通常の教育に活かされることを理解し学びを深めてきました。

同時に、授業を通して多くの当事者の方々と出会い、その声に耳を傾ける経験を重ねました。当事者の思いや願い、そして日々の生活の不便や困難を推し量り理解すること、想像し寄り添うことのできるマインドを育んできました。卒業生はきっと、多様な個性や特性を持ち教室の中で苦戦している子どもたちに真摯に向き合い、最適な学びを創出する努力を惜しまないことでしょう。

通常の学校が変わらなければ、そもそもインクルーシブ教育の実現は考えられません。誰も排除しない共に生きる社会の実現に向けて、まずは「共に学ぶ」学校をつくりましょう。卒業生の皆さんがその担い手となっていくことに期待し応援しています。

教育実習

養成・採用・研修のなかでの教育実習の重要性

教育実習運営委員長 なりた のぶこ
成田 信子

國學院大學人間開発学部では毎年多くの学生が、幼稚園・小学校・中学校・高等学校・特別支援学校で教育実習を行っています。多忙な校務の中で多くの時間を割いてくださっている教育現場の先生方にあらためて感謝申し上げます。

令和4年12月に中央教育審議会答申『『令和の日本型学校教育』を担う教師の養成・採用・研修等の在り方について』が出され、「全ての子供たちの可能性を引き出す、個別最適な学びと、協働的な学び」を実現するための教師の在り方が提言されています。諸外国に比べて教科指導のみならず生活指導にも力を注いできた日本の教育の成果を評価しつつも、子どもたちの多様化、教師の学務にかかる時間の長さ、Society5.0とポストコロナの学び等課題も挙げられています。

先日国際学会（WALS2025）に出かけ、日本の教育とりわけ授業研究に学ぶ各国の先生方と直接お話ししました。世界的にも日本の教育の評価は高いのですが、一方上述の課題にもあるように、教師がICT等の新しい機器を活用して効率的に仕事を進めことにはまだまだ改善の余地があります。教員養成を担っている大学と教員不足に直面している採用、さらには若い先生が多くなっている教育現場での研修の緊密な連携が求められています。

教育実習は、これら連携の要と言ってもいいのではありませんかと考えています。大学は幼児・児童・生徒の学びに関する最新の知見を提供しなければならないことはもちろんですが、教育現場での実際の保育や授業で子どもたちの姿を通して得るものの大きさは他の学びでは代替できないものです。教育実習で先生になる気持ちを固める学生が多いのも事実です。今後は教育実習後の振り返り、自分の課題の解決・追究にさらに力を入れる必要があります。堅実な学びの積み重ねが採用につながる事が大事です。有意な若者が希望をもって教育現場に羽ばたいていけるよう力を注ぐ所存です。

教育実習は想像を超える貴重な宝物

初等教育学科 3年 まつもと けいた
松本 佳大

教育実習による体験は、教師を目指す私にとって様々な学びを与えてくれたものであり、貴重な体験となった。私の担当した六年生の学級は特別支援学級在籍の2名を含め、27名の児童が在籍する。私が実習の初週で感じたクラスの様子は、男女関係なくコミュニケーションを取って壁を感じない反面、休み時間の過ごし方や休み時間と授業の切り替えが苦手とする児童が多い様子が見られた。その時点で私が声をかけても子どもたちは私を「先生」として認識するのではなく、単なる「教育実習生」という認識であったためなかなか指示を聴き入れてはもらえなかった。初週で私の課題ははっきりした。「コミュニケーションを積極的に取る。」にフォーカスしようと考えた。

私のなかで課題ははっきりしたが、六年生という思春期に入りつつある学年でのコミュニケーションは非常に難しいものであった。優しく伝えても聞いてもらえず、厳しく伝えると距離を取られてしまうため上手くいかなかった。さまざまな関り方を試行錯誤した結果、最も手ごたえがあったのは、逆に子どもたちの話を聴くことである。子どもたちの好きなこと・ものをきっかけに話を深堀して聴くと、今までとは一変して話しかけてくれることが増えた。

私は教育実習が始まる前は、正直マイナスなことばかりを考えていた。例えば、大学で学んだことを精一杯発揮できるのか、授業を止まらず進めることができるのか、言葉遣いは大丈夫だろうかなど多くの不安を抱えていた。特に授業を任されたときのプレッシャーは他のことには例えられない。しかし子どもたちと休み時間や給食の時間を通してたくさんのコミュニケーションを取ったことで、普段発言しない子が私の研究授業で発言した。拡大図と縮図の授業で「実際の校舎の高さをどのように求めますか？」と発問した際に黙り込んだクラスの中から「縮図を使うとわかる気がする。」と発言した。それをきっかけに教師のやりがいを感じる事が出来た。想像していた教育実習ではなく一つ一つの体験が宝物になった。今回の実習で体験したことを忘れずに今後も教育について学び続けたいと考える。

教育インターンシップ

子ども理解の難しさの先に見えてくるもの

子ども支援学科 2年 まつ い ち か こ
松井 智佳子

私は、大学2年の冬から始まる保育実習に向けて、教育インターンシップに参加した。初めて保育を学ぶ立場で入る保育現場に、楽しみと緊張を感じながら、子どもや保育者とのかかわりを通して、多くの学びや発見を得る貴重な体験をした。

今回、私は5歳児から0歳児のクラスに順に入らせていただき、実際に子どもとかかわる中で子ども理解を深め、保育者による環境構成や援助の方法について学んだ。特に印象に残ったのは、保育者の個々の子どもに応じた言葉かけの工夫であり、言葉が子どもに与える影響の大きさを実感するとともに、保育者による子ども理解とその保育観から、自分の保育観を見直すきっかけともなった。

具体的な場面として、昼食後の午睡ときに、順次着替えて午睡に入る子どもの中に、中々着替えを始めない子どもがいた。保育者はその子どもにみんなと同じように行動することを無理に強要せず、「〇〇くん、(時計の)長い針が9のところまでに着替えようね」と言葉をかけ、その子どもの姿を見守っていた。その時の状況を保育者に尋ねると、子どもは一人一人できることが異なるからこそ、画一的な指導ではなく、その子どもに合った言葉かけを見つけていくことが大切なのだと分かった。集団保育では、みんなと同じようにできない子どもに目が行き、みんなと同じように行動することを望んでしまう傾向があるが、子ども一人一人の個性に応じたかかわりが保育者の保育観を広げて、子どもの自己肯定感を伸ばし、結果的に目指していた子どもの姿につながることを学んだ。

このように、私は教育インターンシップを通して、日々の保育の中で培われてきた保育者による子ども理解とその保育観が、子ども一人一人の育ちを支えていることを実感した。一人一人個性の異なる子どもを理解し、適切な援助を行うことは簡単ではないが、難しいからこそ、発見や学びが得られたときの達成感は何事にも代えがたく、自身の保育観を育てる大切な糧になるのではないかと感じた。私は改めて保育に対して学ぶ意欲を高めるとともに、これからも多様な経験を通して自分の保育観を広げていきたいと思う。

教育インターンシップ連絡協議会

令和7年7月8日(火)16:00～17:00に令和7年度教育インターンシップ連絡協議会をオンラインで、開催いたしました。今年度、教育インターンシップに関わる学生は、子ども支援学科73名、初等教育学科95名、健康体育学科22名、計190名おります。

当日は、教育インターンシップ受入れ校・園の先生方が28名出席してくださいました。

まず、結城孝治副学部長より教育インターンシップの目的と受入れ校・園の先生方への感謝の言葉がありました。その後、大学のスタッフ紹介がなされ、今年度の教育インターンシップの実施状況について、幼稚園・児童福祉施設については、中野圭祐先生、小学校については、萩野奈幹先生、中・高等学校については、三田沙織先生より報告がありました。すでに教育インターンシップの実習が始まっている学校・園の先生方からは、どのような実習を行っているか、学生の実態などについてご意見、ご感想をいただきました。また初めて受け入れをしていただく学校・園からは、活動時数や活動内容についてのご質問等がありました。大学にとっても、実習のあり方を考える上で貴重な情報交換になりました。

最後に今後の教育インターンシップ関わる手続きや単位認定等についての説明を行い、次回は令和8年1月21日に「第2回教育インターンシップ連絡協議会・報告会」を実施することを伝え、閉会となりました。

教育実践総合センター 夏季教育講座

令和7年7月27日開催

夏季教育講座を終えて

教育実践総合センター 副センター長 やま だ 山田 よし ひろ 佳弘

第16回目となった本年度の夏季教育講座は、猛暑の中、これまでの記録を更新する大勢の参加者を迎えて実施されました。今回のテーマは「主体的に学び合う子どもの育成」とし、サブテーマを「探究的な学びを実現する授業・活動のデザイン」として基調講演に引き続き、各教科・領域の分科会を実施することができました。基調講演は、キャンパス内で一番大きな教室を設定しましたが、予想を上回る参加者のため、急遽、別教室を準備して2教室をオンラインで中継する処置をとるほどの盛況ぶりでした。

今年度の全体テーマは改訂が近づいてきております「新学習指導要領」を意識して設定いたしました。そのため、教育実践総合センター運営委員会では昨年後半より文部科学省の発表資料等を検討し、このテーマに合った企画を練り上げてまいりました。特に、参加いただきました現職の先生方に有益な情報を提供できるよう、基調講演に元本学教授であった田村先生を文部科学省よりお招きできたことは成功と言えます。多くの参加者の皆様が熱心にメモを走らせていることから、テーマへの関心の高さを感じました。ただ、基調講演の設定時間が少々短く、急ぎ足での講演となってしまうことが田村先生にも参加者の皆様にも消化不良だったかもしれません。これは次年度以降の課題

としたいと思います。

基調講演後に行われました8つの分科会は、それぞれの分野で全体テーマに即した独自テーマを、「探究的な学び」「自律的な学び」「ICT、DX」「授業デザイン」「主体的な学び」などのキーワードを盛り込み、時間いっぱいまで活発な意見交換が実施されました。

そして何よりも学部として嬉しい現象は、各会場で卒業生の姿が多くみられ、各分科会への話題提供者としても年を重ねるごとに卒業生が拡大していることです。この現象は当日参加していました学部生も教育界で活躍する卒業生の自信に満ちた姿に将来の自分を重ねることができ勇気を与えられたと思います。まさしくこれは本企画開催の大きく育ってきた成果と言えます。今後の本企画においても更なる卒業生の参加を期待したところです。

来年以降の夏季教育講座を今後も、学部3学科体制の強みを生かして、日本のより良い教育の在り方について、子どもたちの存在を中心に据えてテーマを考えてまいります。どの教育現場においても子どもたちが生き生きと学べる仕組みと環境に役立つ内容を多くの関係のある皆様と活発な意見を交わしていけたら幸いです。

